

フライデーあるいは太平洋の冥界

M. トゥルニエ 著／榊原晃三 訳

岩波現代選書

フライデーあるいは太平洋の冥界

岩波現代選書 72

一九八二年八月二三日 第一刷発行 ©

定価一八〇〇円

訳者 榊原晃三さかき ぼろ てる ぞう

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五

電話 〇三二六五〇四二一
振替東京六二六三四〇

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

フライデーあるいは太平洋の冥界

ますます高くなる波のうねりの底でヴァージニア号が傾いている傾きの大きさを、船室の天井からぶらさがっている舷灯が、その横揺れによって鍾線のように正確に測定していた。ピエテル・ファン・デイスル船長は上体をのり出すようにして、ロビンソンの前にタロット・カードを置いた。

「よく切つて、いちばん上のカードをひっくり返したまえ」と船長はロビンソンに言った。それから、また肘掛椅子に腰を落として、陶器のパイプを一服吹かした。

「それは〈創造主〉だ」と彼が説明する。「三大基本秘法の一つだよ。その創造主は、雑多な事物がいっぱい並べてある仕事台の前に立つ道化師として現われている。これは君の中に組織者がいることを意味している。彼は無秩序な宇宙と戦い、その宇宙を富の力で支配しようとしている。彼はそれに成功しているようだが、この創造主もまた道化師であつて、彼の仕事は幻想であり、彼の秩序は偽りのものであることを忘れてはいけぬ。不幸にして、彼はそれに気づいていない。懷疑は彼の得意とするところではないのだ」

にぶい衝撃が船を揺すぶつて、舷灯が天井と四十五度の角度を作った。とつぜん船首を風上に

向けたので、それでヴァージニア号が風に向かつてほとんど斜めになってしまっていて、今、波が砲撃のような音をたてて船橋に崩れたのだった。ロビンソンは二枚目のカードをひっくり返した。そこに見たのは、王冠をかぶり、王杖を持って、二頭の駿馬が牽く戦車の上に立っている、脂あぶらのしみに汚れた一人の人物だった。

「戦いの神（マルス）だ」と船長が言う。「小さな創造主は自然に対する明白な勝利を勝ちとったのだ。彼は力によって勝ち、自分とそっくりな秩序を周囲に押しつける」

自分の席の上で仏陀のようにちぢこまりながら、ファン・デイスルは皮肉で光るまなざしでロビンソンを包んだ。

「君にそっくりな秩序だ」と彼が考えこむような様子で繰り返す。「男の魂を突き刺すのに、絶対的な力を身にまとう自分を想像するにまざるものはない。王Ⅱロビンソンというわけだ……君は二十三歳だ。君は見捨ててきた……うむ……多勢の同胞の例にならって（新世界）で、山、当てようと、若い女房と二人の子供をヨーク（イギリス北東部の町）へ置いてきてしまった……やがて君の同胞たちが君に追いつくだろう。とどのつまり、もし神がお望みなら……君の短く刈った髪、赤く四角いあごひげ、明るくて前を真直ぐ見てはいるが、どういうわけかじつと動かぬ、視野を制限されているようなまなざし、飾り気のなさが氣どりに近い身なり、こういうものすべてが、今まで決して何事も疑ったことのない幸せな男たちの部類に君を分類している。君は信心深くて、吝嗇けちで、

純粹だ。君が君主となる王国は、汚点^{しみ}一つなく、ラヴェンダーの匂袋で香りをつけられたシーツやテーブル・クロス（森の神サデニロスの祖父）の山を家庭の主婦が片づけておく大きな衣裳ダンスに似ているだろう。怒りたもうな。赤くなりなさんな。わたしが君に言っていることは、君がもう二十年^{とし}齡をとって初めて屈辱に思うことなのだよ。実際、君はすべてを知るべきだ。もう顔を赤らめるのはよして、カードを選びたまえ……ほら、わたしが言ったとおりだろ？ 君は（隠者）をくれる。戦士マルスは自分の孤独に気づいたのだ。彼は洞窟の奥に引きこもって、そこで自分の根源を再発見しようとする。ところが、こうして大地の真只中に入りこみ、自分自身の奥底で旅をなしとげて、彼は別の人間になった。もし彼がいつかこの隠れ家から出てきたら、自分の硬化した魂が深いひび割れを蒙ったことに気がつくだろう。もう一枚カードをひっくり返してくれたまえ」

ロビンソンは躊躇した。己れの享樂的な唯物論に徹しているこの太ったネーデルランドのシレノス（酒神バックスの養父で、森の神サデニロスの祖先）は、確かに人を不安に陥れる響きのある言葉を持っていた。リマ（ペル^{ペル}の首都）でヴァージニア号に乗船して以来、この男が見せびらかす破壊的な知性とシニカルな享樂主義にたちまち辟易させられて、この奇妙な男と鼻を突き合わせるのをなんとか避けてきたのだった。自分の船室に言わば囚われているためには、この嵐が必要だった——船室はこのような場合、わずかばかりの慰めを与えてくれる船中唯一の場所だった。ところがオランダ人は、この機会を十分に利用して素朴な乗客をからかってやろうと決めこんだらしい。ロビンソンが酒を飲むのを断る

と、タロット・カードがテーブルの引出しから現われ、そしてファン・ディセルは自分の効く能力にはけ口を与えたのだった——そうこうするうちに、嵐の轟音はまるで不吉なゲームを伴う魔女の夜宴のばか騒ぎよろしくロビンソンの耳に鳴り響き、ロビンソンはその不吉なゲームにいやでも巻きこまれてしまったのだった。

「ほら、〈隠者〉を洞窟から引っぱり出そうというやつが現われた！ 〈ヴィーナス〉が自ら水から浮かび出てきて、君の花壇を歩き始めている。もう一枚カードをたのむよ。ありがとう。秘法第六番、つまり〈射手^い〉だ。翼のある天使に変えられた〈ヴィーナス〉が太陽に向かって矢を射る。もう一枚だ。ほら、〈不幸〉が出た！ 君は秘法第二十一番、つまり〈渾沌^{カオス}〉の秘法を出してしまったのだ！ 〈大地〉の野獣が焰の怪物と闘っている。君が対立し合ういくつかの力の間にとらえられて見ている人間は、持っている道化杖でそれと知れる道化だ。さなきだに、こうなるわけだ。もう一枚よこしたまえ。結構。これを予想すべきだった。これは秘法第十二番の吊された男を表わすサトゥルヌス^{（ローマ神話の農耕の神）}だ。だが、ねえ君、この人物においてもっとも深い意味を表わしているところは、両足で吊られているということだ。だから、クルーソー君、気の毒だが、君は逆さになっているのだ！ 速く次のカードをよこしたまえ。ほら、秘法第十五番、〈双生児^い〉だ。射手^いに変貌したわがヴィーナスはどんな新しい転身を見せるかと思っていたんだ。ところがヴィーナスは君の双児の兄弟になった。〈双生児〉は両性具有の天使の両足に首をくくりつけられているよ

うに表わされている。このことをよく憶えておきたまえ！」

ロビンソンは上の空だった。しかし波の強襲の下にある船体の呻きは、さほど彼を不安にさせなかった。船長の頭の上にある舷窓の視野の中で踊っている一握りの星の動きも同様だった。

ヴァージニア号は——たとえ好天のときでもあまり足の速い船ではなかったとは言え——不意に嵐に見舞われてもびくともしない船だった。低くて毅然たるところのない帆柱と、二百五十トンの短くて丸々と太った船腹を持つこの船は、海の駿馬どころか鍋かバケツのほうに似ていた。そして、その船足ののろいことは、寄港する世界のすべての港で愚弄の種になっていた。しかし、いちばん近い海岸に危険の種になりそうなものさえなければ、暴風でどんなに暗い夜でも、乗組員たちは枕を高くして眠ることができた。これに加えて、船長の性格があった。彼は風や潮と闘ったり、危険を冒しても船の進路をそらせまいとしたりするような男ではなかった。

西暦一七五九年九月二十九日の午後おそく、そのときちょうどヴァージニア号は南緯三十二度線上にいたはずだが、気圧計がはつきりと垂直降下を示す一方、セント＝エルモの火（帆桁や帆柱の先端で時に見られる空中放電）が帆柱や帆桁の先端で光る冠毛のようにもって、たぐいまれな激しさを伴う嵐の到来を

予告していた。この小型ガリー船がそちらに向かってゆっくり進んでいる南の水平線は真暗で、降り始めた雨滴が船橋の上で潰れたとき、これが無色であるのにロビンソンがおどろいたくらいだった。硫黄色の夜が再び船の上に垂れこめたとき、やはりまだむらがあって変わりやすい北西

の微風が嵐となつて湧き立ち始め、それは羅針盤上五、六ローンプ（ローンプは羅針盤三二万位の二点間の角距離、11度15分）の間で揺れたにちがいない。まだ平静を保っているヴァージニア号は、か弱い力をふりしぼって長く、高い波のうねりと勇敢に闘っていたが、波は羽搏くごとに船の鼻先を己れの羽の中に突っこませていた。しかし船はひたすら頑固に航跡を残し、この頑固さがファン・デイセルの嘲るような目に同情の涙を催させた。しかし、二時間後には、胸を引き裂くばかりの爆発音が彼を船橋に駆り立てて前檣を見に行かせた。前檣は風船のようににはじけ、もう、一切れのぎざぎざの布の総ふさしか風になびかせていなかった。そのとき船長は、名誉はかくてすでに十分に保たれた、これ以上意地を張るのは賢くないと判断した。彼は帆をおろさせ、舵手に運を天に任せるよう命じた。それから、嵐は自分に従順であることをヴァージニア号に感謝しているようだった。嵐は泡立つ海の上を苦もなく疾走し、激昂していた海もとつぜん嵐を無視したかに見えた。ハッチを念入りに閉めさせると、ファン・デイセルは乗組員に中甲板への立入りを禁じた——当直で居残っていた乗組員一名と船で飼っている犬のテンだけは例外だった。それから彼自身は、どれも慰めになるオランダ哲学、ジンの入っている藁フイアスゴと壘ゴ、クミン入りチーズ（クミンはせり科の植物で、その種子は香辛料、薬用となる）、ライ麦のビスケット、鋪石のように重いティー・ポット、そしてたばこパイプにとりまかれて、船室に閉じこもってしまった。十日前、左舷の水平線に見えた緑色の一線が、今、南回帰線を越えて、デスペントウラードス諸島のそばを航行していることを乗組員に知らせたのだった。そのまま南に向

かつて進んで行っていたら、船は翌日からフェルナンデス諸島の海域に入っていたはずだった。ところが嵐が船を東のほうへ、つまりチリ海岸のほうへ追い立てたのだが、船はまだチリ海岸から百七十海里も隔てられていて、海図で判断する限り、この間には島一つ暗礁一つなかった。だから、心配することは一つもなかったのだ。

船長の声はしばし騒音に包まれていたが、やがて再び聞こえた。

「十九番目の重要な秘法、〈獅子〉の秘法の上で、また〈双生児〉の二人づれにお目にかかる。二人の子供は太陽の〈都市〉を象徴する壁の前で互いに手を取り合っている。太陽の神は自分に捧げられたこの壁のてっぺんに座を占めている。太陽の〈都市〉——それは時間と永遠、生と死の間に宙吊りになっているが——では、住民たちは両性具有と言うよりむしろ両性が循環する太陽の

セクシュアリティ

性　にまで達して、子供らしい純真さをまとうている。自分の尻尾を噛んでいる蛇は、損失

も失敗もないこの自分自身の上で閉ざされているエロティシズムの象徴だ。これは獲得するのは果てしなくむずかしい、まして失わないでいるのはもっとむずかしい人間の完全の頂点なのだ。

君はそこまで昇るように運命づけられているようだ。少なくともエジプトのタロット・カードはそう言っている。敬意を表するよ、お若いの！——そして船長はクッションの上で身体を起こして、皮肉とも真面目ともつかぬ態度でロビンソンの前でお辞儀をした——しかし、もう一枚カードをくれたまえ。ありがとう。あ！〈山羊〉だ！　これは魂の出口つまり死だ。手や足や首が

まき散らされている牧場で草を鎌で刈っているこの骸骨が、その鎌の刃にくっついて離れない不吉な意味を十分に物語っている。太陽の（都市）のてっぺんから転がり落ちた君は、今や大きな危険にさらされている。今度はどんなカードが君に当たるか早く知りたいが、それを知るのがこわくもある。もし今度のカードが弱いしだったら、君の話も一卷の終りだ……」

ロビンソンは耳をそば立てた。人間の声と犬の吠え声が海と荒れ狂う風の大交響楽に混じり合うのを聞かなかっただろうか？ 聞いたと断定するのは確かにむずかしかった。たぶん彼は、この冷酷な地獄の真只中で、当直用に上甲板に張ってある雨覆いの仮避難所の下にくくりつけられている水夫のことに内心氣をとられすぎていたのだろう。その水夫は捲揚機に堅くゆわえつけられていたから、自分で綱を解いて急を知らせることはできなかった。それでも彼の叫び声は聞こえるだろうか？ それとも、さきほど彼は確かに叫ばなかっただろうか？

「（ジュピター）（天地至高の神であり、電光雷鳴の神でもある）だ！」と船長が叫んだ。「ロビンソン、君は救われたよ。でも、

なんとまあ君は遠くから戻ってきたもんだろう！ 君は垂直に滑り落ち、そして天の神がおどろくべき好機をつかんで君を助けにやってくる。神は地の底から生まれた黄金の子供に化身して——ちょうど金鉾からもぎとられた金塊のような——太陽の（都市）の鍵を君に渡すのだ」

ジュピターだと？ 嵐の怒号を聞いたのはまさしくこの言葉ではなかったか？ ジュピターだと？ いや、ちがう！ 陸地だ！

さきほど当直の水夫は、陸地だ！ と叫んだのだった！ そして、実は、たとえ砂浜や暗礁のある未知の海岸が近づかなくとも、水夫はこの主のいない船の上ではもっと早く急を告げるべきではなかったらうか？

「こういうことはみんな、君には理解を越えたわけのわからない話のように見えるにちがいない」とファン・デイセルが説明した。「しかし、決して明瞭な表現ではわれわれの未来を照らさないところこそ、まさしくタロット・カードの知恵というものだ。未来について明快な予想を生む無秩序というやつを、君は想像できるかね？ いや、せいぜい、われわれには己れの未来を予感することが許されているだけだ。わたしがさっきから君に説明していることは言わば暗号であって、この暗号を解く鍵は君の未来にほかならない。君の未来に起こる出来事の一つ一つが現実のものとして生まれつつ、わたしの予言のしかじかの真実を君に啓示するのだ。この種の予言は、まず最初に現われ得るものと同じような現実性のないものでは決してないのだ」

船長はアルズ風の長いパイプの曲がった吸口を黙ってしゃぶった。パイプの火は消えていた。彼はポケットからナイフをとり出すと、錐を起こし、それを使って火皿の中身をテーブルの上に置いてある貝殻の中へ空けようとした。ロビンソンはもう荒れ狂う自然の喧騒の中に異様な物音は何も聞かなかった。船長は丸い木の蓋についている革の舌を引っぱって、たばこ入れの小さな樽を開けた。それから、そっと注意深く、取付け式の火皿の内部が非常にもろい大きなパイプを、

樽にいっぱい詰まっているたばこの中に滑りこませた。

「こうしておけば」と彼が説明した。「パイプが当たって割れるのを防げるし、それに（アムステルダムール）のいい匂がパイプに滲みこむんだよ」

それから、とつぜん不動の姿勢をとると、真剣な表情でロビンソンを見つめた。

「クルーソー君」と彼は言った。「わたしの言うことをよく聞きたまえ。純粹から身を守りたまえ。純粹は魂を焼く濃硫酸だよ」

そのとき舷灯が鎖の先で激しく九十度の弧を描いて船室の天井にぶつかってぺちゃんこになり、一方、船長は頭を先にテーブルの下にとびこんだ。周囲のめりめりという音に満ちた暗闇の中で、ロビンソンはドアの把手のほうを手で探してみた。だが、何も見つからず、激しい空気の流れによって、そこにはもうドアはなく、すでに歩廊に出てしまっていることを知った。彼の全身は、船の深い動きに続いて起こったおそるべき静止を足元に感じるという死ぬほどの不安を覚えた。満月の悲痛な光にうすばんやりと照らされた船橋の上で、彼はボートを吊り具のほうへ押している一群の水夫たちをはっきり見わけることができた。そして、その水夫たちのほうへ行きかけたとき、足元で床が崩れた。まるで無数の雄羊が小型ガリィ船の左舷の船腹に押し寄せてきてぶつかったみただった。するとたちまち、黒い海水の壁が船橋の上に崩れ落ち、端から端まで洗い流して、何もかも一切合財持ち去っていったしまった。

波が砕け、濡れた砂浜の上を走り、そして砂にうつ伏せになって横たわっているロビンソンの足を舐めた。まだ半分意識を失ったまま、彼は上体を起こして、岸に向かって数メートル這った。それから仰向けになって転がった。黒と白のカモメが青みがかった空で鳴きながら旋回していた。その空では、東のほうでちぎれている一筋の白みがかった緯糸が前日の嵐の名残りのすべてだった。ロビンソンは少々努力して座ると、たちまち左肩に急激な痛みを覚えた。砂浜には腹の裂けた魚や、足の折れた甲殻類や、打ち上げられて褐色になった海藻の束が散らばっていた。その海藻は海のある程度深いところにしかないようなものだった。北と東のほうで、水平線は沖に向かってひろびろと開けていたが、西のほうでは岩の多い断崖でさえぎられていた。断崖は海中にせり出し、鎖のように連なる暗礁となって沖に伸びていた。その岸から二ケール（二ケールは約二〇メートル）ばかり離れたところに、波の砕け散る暗礁に囲まれて、ヴァージニア号の物悲しげで滑稽なシルエットが立っていた。横桁の折れたマス

ト、風になびく支櫓索が黙って悲嘆の叫びを上げていた。

嵐が起こつたとき、ファン・デイセル船長の小型ガリー船はファン・フェルナンデス諸島の——彼が信じていたように北ではなく——北東にいたにちがいない。従つて、暴風の下をにげた船は、この島とチリ海岸の間に広がる百七十海里の広大な海に自由に流されないで、マス・ア・ティエラ島海域に追い立てられたにちがいない。と言うのが、少なくともロビンソンにとつていちばん不都合でない仮定だった。と言うのは、ウィリアム・ダンピア（十七世紀のイギリスの航海者）の記述によれば、マス・ア・ティエラ島の九十五平方キロに及ぶ熱帯森林と原野には、イスパニア原産の植物はかなりまばらにしか生育していないからだつた。しかし、船長が船位の推算を少しもまちがえず、従つてヴァーヅニア号がファン・フェルナンデス諸島とアメリカ大陸の間のどこかにある未知の小島にぶつかつて碎けたことも、やはりあり得ることだつた。いずれにせよ、ひょつとしたらいるかも知れない生存者と、これはとにかく住民がいての話だが、島の住民の搜索を始めるべきだつた。

ロビンソンは立ち上がつて数歩歩いた。身体はどこも折つていなかったが、左肩に受けた打身うちみが大きな青あざになつていた。すでに天高く昇っている太陽の光が目には痛かつたので、彼は羊歯の葉を円錐形に巻いて頭にかぶつた。羊歯は海岸と森の境にたくさん生えていた。それから彼は木の枝を拾つて杖にすると、断崖のてっぺんから火山作用でせり出した岬のふもとを覆っている茨の雑木林の中に入りこんだ。その断崖のてっぺんから方角を確かめられるかも知れないと思つたのだ。